

ポストソ連時代のキューバ文学を読む

——キューバはソ連をどう描いたか？——

久野 量一

はじめに

1959年の革命以降のキューバ社会には、日常生活の隅々にまでソ連（ロシア）の文化が流入するようになり、ソ連崩壊までのおよそ30年間、それらはキューバ文化に影響を及ぼし続けた。ある研究者が言うように、革命を境にしてキューバは、第二世界と第三世界のあいだ、社会主義と低開発のあいだ、東欧とラテンアメリカのあいだを生きることになったのである¹。もともと、さまざまな民族文化が混淆し、「アヒアコ（ごった煮）」という料理の比喻で語られることも多いキューバ文化に、さらにボルシチが加わったわけである²。

キューバにおけるソ連文化の存在は映画でも確認できる。革命から5年後の64年、『怒りのキューバ（スペイン語タイトル：*Soy Cuba*）』という映画がソ連とキューバの合作で製作された。ソ連側は監督にミハイル・カラトゾフ、脚本に作家のエフゲニー・エフトシェンコを出し、キューバからは、のちに『低開発の記憶』（1968）の主人公を演じるキューバ人俳優セルヒオ・コリエリが参加している。革命プロパガンダの内容ながら、芸術性の高い映画となっている。このようなソ連とキューバの合作映画をめぐるのは、キューバの事情に詳しい人と、ソ連の映画事情に詳しい人（少なくともロシア語の出来る人）が一緒に取り組めば、興味深い考察が可能になるのではないだろうか³。

映画にかぎらず、21世紀に入ってから、キューバ文化におけるソ連文化の痕跡の意義を検討しようとする動きが盛んになっている⁴。両国の蜜月30年の歴史、ソ連がキューバに残した政治的・経済的・文化的な「遺産」をどう評価するかが研究の主題である。遺産のなかには、ソ連の人々が島に残したもののみならず、ソ連や東欧に留学したキューバ人の経験も含まれる。研究にはいろいろな立場があって、ソ連がキューバを「植民化」したという植民地主義批判的な見方もあるし、「ソ連はキューバに何も残さなかった」、つまりアヒアコはアヒアコであって、ボルシチとは混ざらなかったというキューバ文化純粋主義的な見方もある。

ただ、こうした関心が生まれた背景には、ソ連時代のキューバへのある種のノスタルジーがあるだろう。ソ連崩壊後、急速に変わりつつあるキューバの混沌を前に、憧憬をもって失われた過去を想起したくなる人々がいてもおかしくない。このようなノスタルジー現象は、統一後のドイツに巻き起こった「東ドイツ時代は良かった」という「オスタルギー」と似ている面もあるようにも見えるが、果たしてどうなのだろうか⁵。

筆者は、こうした近年の研究の動向（主にカルチュラル・スタディーズの分野で進んでい

る)を意識しながら、キューバとソ連のかかわりを描いた文学作品をいくつか読み進めてみた。ここではそのうちの三篇をブックレビュー風に綴り、キューバ文学の新たな一面として提示しつつ、作品の意義を探ってみることとしたい⁶。

1. アデライダ・フェルナンデス・デ・フアンの場合

最初は、キューバを舞台にロシア人が登場する短篇小説を見てみよう。キューバ人女性作家アデライダ・フェルナンデス・デ・フアン(1961～)の「Clemencia bajo el sol(太陽の下での慈悲)」という作品で⁷、ロシア女性エカテリーナとキューバ男性レイエス夫婦の15年を、夫婦の隣に一人で暮らすキューバ女性クキの視点から語ったものだ。

エカテリーナはソ連に留学していたレイエスと結婚し、ハバナに引っ越してくる。ハバナに来て間もなく子供も生まれ、いよいよ新生活が開始する。当初、エカテリーナはソ連から家具を運ばせ、ソ連と変わらない生活を続けようとするが、親切に接してくる隣人クキとの付き合いを通じ、徐々にキューバの生活習慣に慣れ、またスペイン語も上達していく。しかしその一方でソ連の思い出は失われていき、しかも仕事で留守がちな夫との喧嘩が絶えない。

この小説で面白いのは、エカテリーナとその息子が、クキとその息子との友情から徐々にキューバ化し、また逆の作用も起きるところである。最初はロシア料理しか関心のなかったエカテリーナがだんだんキューバ料理を作るようになり、息子はキューバ・コーヒーが好きになる。スペイン語を修得したエカテリーナはスペイン語からロシア語への翻訳仕事さえする。このような変化と同様に、クキのほうの息子はロシアン・ティーが大好きになり、これまで本など読んだことがなかったクキもまた、エカテリーナの勧めでスペイン語に翻訳されたロシア文学を読み始め、ついにはトルストイ(『アンナ・カレーニナ』)やチェーホフ(「犬を連れた奥さん」)を読破するのである。

弱々しいエカテリーナ(「頭のとっぺんから足のつま先までロシア人」で「金髪」と強いクキ(混血で一人暮らし。息子を女手ひとつで育てる)という対照的な二人が友愛関係を結び、相互に影響を及ぼし合いながら成長していく様子は、ソ連とキューバの対等な関係を暗示し、ユートピア的ですらある。

しかし幸せには終わりがある。気がついたときには、夫にキューバ女性の愛人ミレーナがいた。こうして結婚15年が過ぎる頃、失意のエカテリーナはキューバでの生活を諦めることをクキに伝え、一人息子を連れて国に帰るのだ。物語の結末はクキによるミレーナへの復讐である。エカテリーナの置いていったソ連の家具や本をミレーナが公園で売り払っているのを見かけたクキは、憤慨して思わずミレーナを殴り殺してしまう。「女のあたしのありったけの力で頭を三回殴ったんですよ。信じられないかもしれないけど、殺すつもりなんかありませんでした。ただ痛めつけてやりたかっただけです。あの女はそうされて当然なんですよ。後悔なんかしていません。言い残したことですって? あの女の血でトルストイとチェーホフの本が汚されたことが残念でならないわ。」

2. ヘスス・ディアスの場合

豊富なソ連滞在経験があつて、それを表現しているキューバ作家も少なくない。1960年代から80年代にかけては多くのキューバ人が、推計によれば年間およそ8000人がソ連の大学に留学している⁸。それ以外にもさまざまなケースでソ連に渡り、そのなかにソ連を舞台にした作品を書いている作家たちがいる。

こうした一群のなかで、質量ともに抜きん出ているのは、ホセ・マヌエル・プリエト（1962～）である。シベリアの首都と言われるノヴォシビルスクで技術系の勉強をして、合計で12年間ソ連に住んだ経験の持ち主だ。長篇作品としてソ連ものの三部作『*Enciclopedia de una vida en Rusia*（ロシア生活百科事典）』（1997）、『*Livadia*（リヴァディア）』（1999）、『*Rex*（レックス）』（2007）があり、これ以外にも紀行ものとして『*Treinta días en Moscú*（モスクワでの一か月）』（2002）がある。タイトルからもソ連経験抜きには書かれなかったことが分かる。プリエトはロシア文学のスペイン語翻訳も手がけ、知られているものとしてアンナ・アフマトーヴァ、マヤコフスキー、プロツキー、ソルジェニーツィンの翻訳がある。ソ連を去ったあとはメキシコを経て、現在は米国の大学で教鞭をとっている。

ソ連生まれの作家も挙げておこう。エドゥアルド・デル・ジャーノ（1962～）はモスクワ生まれで、フェルナンド・ペレス監督作品『*La vida es silbar*（人生は口笛のように）』（1998）の脚本にも参加する映画人だが、小説も書いていて短篇集などにその名を見かける⁹。詩人ではエルネスト・ゴンサレス・リトビノフ（1969年、ヤルタ生まれ）や、アンドレス・ミール（1966年、モスクワ生まれ）といった存在が知られている。

こうしたなかで、映画作家、言論誌編集者としてキューバ革命を支えた知識人ヘスス・ディアス（1941-2002）の長篇小説『*Siberiana*（シベリアの女）』（2000）を紹介しよう¹⁰。

主人公はキューバ黒人のバルバロ、25歳。キューバの雑誌記者として、バイカル・アムール鉄道の敷設を取材しようとシベリアを訪れる。学生時代にキューバで白人の軍人からレイプされたことはあるが女性との体験はなく、ソ連でこそ絶対に女性を知りたいのだと秘かな決意を固めていた。初めての飛行機は恐怖の連続で、震え上がりながらもどうにかモスクワに到着、次いでイルクーツクまで飛び、あとは陸路でシベリアを巡ることになる。イルクーツクからは通訳件ガイドのナジェーダ、青い眼をしてプラチナ・ブロンドの女が同行する。（ありきたりな展開だが）バルバロは彼女に恋をする。しかし彼女はバルバロに関心を示しつつも、寄せ付けない雰囲気があつていらさせられる。そもそも彼女がなぜスペイン語を話すのか、どういう来歴の持ち主なのか謎のままシベリア巡りは続けられる。バルバロはシベリアの行く先々でさまざまな挑戦を受ける。未体験の酷寒や意志の疎通における苦労は言わずもがな、歓迎パーティでは酒の飲み比べの挑戦を受け、酔いつぶれる。ロシア式サウナではどう振る舞ったらよいのか戸惑うばかり。男らしさの体力競争もさせられる。外国人であるばかりか黒人でもあり、その珍しさから二重の人種差別を受け続け、寒さにやられて肺炎にもかかる。バルバロはキューバ人のプライドにかけてこれらすべてをどうにか乗り越える。しかしそのころには旅も終わりに近づき、イルクーツクに戻る日が迫っている。別れを目前にして、いよいよナジェー

ジダは身の上話をはじめる。彼女の母はスペイン内戦時に逃れてロシアにきたスペイン人だった。ロシア人と結婚したが、その男が政治犯としてシベリアに送られたため、夫婦そろってシベリアにやって来る。そうして生まれたのがナジェージダである。長じて彼女も結婚するが、やはり相手が政治犯としてコルィマ鉱山に送られる。その夫もいまは収容所を出たが廃人同然で、彼女が面倒を見ている。そんな折りにやってきたバルバロに、彼女は一目見たときから惹かれた。一緒に旅をするうちに愛する気持ちも生まれているが、といって夫を捨てることはできない。したがってバルバロの気持ちは分かるけれども、一緒にはなれないので、大人しくキューバに帰り、自分のことは金輪際忘れてほしい…… 彼女がバルバロに語った内容はこういうもので、夢破れたバルバロはキューバ帰国を決意する。だが出発前夜の歓送パーティでいざこざがあり、彼女は夫を捨ててバルバロの元へと向かい、二人は結ばれる。もっとも、その幸せも束の間、肺の弱いバルバロは再び病に倒れ、そのまま昏睡状態に入り、三日後亡くなってしまう。その後、失意の彼女もまたアンガラ川に身を沈める。

ロミオとジュリエット並みの障害に満ちた純愛小説とっていいが、ここでも先の短篇のように、キューバとソ連は対照的な文化として提示されている。この長篇では舞台をシベリアに移し、黒人と白人、熱帯と酷寒、南と北（あるいはシベリアという東とキューバという西）などの差異がキューバ人の目の前に立ちはだかる。しかしこの小説の肝は、キューバ黒人がこれら圧倒的な差異を乗り越えようとする涙ぐましい努力にある。短期間の滞在でロシア語を身につけるまでにはいかないが、それでもいくつかの言葉を覚え、通訳なしでもカメラマンや運転手とコミュニケーションをとろうとする。キューバの民間信仰サンテリアとロシアの信仰を習合させようとしたり、モンゴル系ロシア人をキューバの中国系移民と比較したりする。バルバロはこれまで自分が属していた文化とはまったくかわりのないソ連を、ロシアを、シベリアを理解しようと努めるのだ。

3. ソ連時代へのノスタルジー

こうしてみると、最初の短篇のほうでは女と女の友情、二篇目の長篇では男と女の恋愛を通じ、ソ連との文化的差異を前提にして、誠実なキューバ人が相手の文化を理解し、乗り越え、交わろうとする鋭意に焦点が当てられている。その意味では、両作品ともにキューバからソ連に秋波を送っている作品である。米国と国交を断絶して東側ブロックに入り、ソ連や東欧と強い結びつきが生まれる過程でキューバ人のとった道筋を示すものだ。しかし両作品ともハッピーエンドではない。エカテリーナの帰国でクキは友を失い、バルバロとナジェージダの恋愛は悲劇に終わる。これはソ連崩壊にともなう両国関係の終了を描いたものとみてよいのだろうか。即決はできないが、ここで興味深いのは、両作家がこの作品でソ連時代のキューバをどのように思い起こし、描こうとしているかである。

最初の短篇について言えば、クキはこの短篇のなかで、70年代から80年代の、ロシア製の物に囲まれていた生活を懐かしく振り返っている。それはたとえば、「とんでもなく重たい腕時計と煉瓦みたいな靴」や、空腹を癒してはくれたが美味しくない「缶詰の肉と瓶詰めのリン

ゴ」である。キューバ人はソ連時代には、「ロシアの物なんてとんでもないシロモノばかり」と、文句ばかり言って暮らしていたのだった。しかしいざソ連が崩壊し、それとともにロシア人がいなくなり、ロシアの物が手に入らなくなってみると、あのころの苦労がむしろいい思い出として蘇ってくる。クキは言う。「ロシア人はみんないなくなった。あたしはもう、来たり帰ったりというのには飽き飽きさ。強くはなれるけど、限界っていうものがあるんじゃないのかね。」

エカテリーナとの良い思い出ばかりを語るクキはどうやら、変わってしまった今のキューバよりも、ロシア人がいてロシアとともにあったあの頃のキューバを取り戻したいと思っているようだ。この短篇は、クキが警察か裁判所のような場所で殺人の自白をする「陳述」から成っている。罪を告白しながら過去を思い起こすとき、クキはエカテリーナとの関係を必要以上に美化しているかもしれない。彼女の陳述は、それを聞いている裁判官や警察官（＝読者）に、過去を古き良きものとして思い出させる効果がある。こうしてこの作品からは、「あの頃はよかった」というノスタルジーが漂うことになっている。この作品が発表されたのは 1996 年、ソ連崩壊から 5 年後である。実は作者アデライダは、フィデル・カストロの革命文化政策を担った曰く付きの知識人フェルナンデス＝レタマールの娘である。彼女にとってトルストイとチェーホフは、汚してはならない古き良き時代の象徴として懐古されているのだろうか。

二篇目の『シベリアの女』はどうだろうか。この小説は、作者が 1977 年にドキュメンタリー撮影のためにシベリアを訪れたときの経験をもとに書かれたという。しかし小説が書かれたのは 2000 年になってからである。なぜ四半世紀も過ぎてから書かれたのだろうか。しかも書いたとき、ディアスは亡命してキューバを離れてスペインにいた。島を出てから書いたことが作品に何か特別な趣を与えているだろうか。

先に述べたように、ディアスはもともと革命を支える重要な知識人だった。しかし 89 年にキューバを去り、キューバに民主的な社会を実現しようとする言論誌をスペインで立ち上げた。彼の立場は、キューバ革命の理念は間違っていないものの、カストロの独裁とアメリカ合衆国の経済封鎖はキューバにとって障害になっているというものだ。そのような彼がポストソ連時代に入って書いたこの小説を見ると、そこにはやはりキューバとソ連の蜜月時代への懐かしい愛情を感じざるを得ない。

そもそもバルバロの欲望の対象となる「女」＝神秘は、キューバにとっての 70 年代から 80 年代のソ連、ロシアの文化のことをさしている。その対象であるナジェージュダはロシア語で「希望」を意味するという¹¹。となると、この小説はキューバがその未来をソ連という「希望」に託した物語だと解せる。しかもその希望はシベリアという最も奥深い地方にあって、キューバ人はそこを分けいく。さまざまな挑戦を乗り越え、シベリアを踏破するキューバ人という設定。ここに、キューバと歴史的にも文化的にもかわりの極めて弱いソ連を徹底的に理解しようというキューバ人の強烈な意志を感じ取ることができる。

でありながらも、この小説の結末は悲劇である。そしてこの悲劇の結末に立ち会ったとき、読者の頭のなかにただちに浮かびあがってくるのは、いったいバルバロ＝キューバ人が挑んだあの超人的とも言えるソ連理解に向けての努力を、それが終わったいま、どう解すべきかと

いう問題である。

この作品を通じて、たしかにバルバロのナジェージダに対する愛は揺るぎない真実だった。それは否定できまい。というよりもその真実性をこの作品は強く肯定している。それはまるで、当時のキューバからの東側ブロックへの忠誠が真実であるのと同じである。しかしその幸せは束の間しか続かず、二人が死んだいま、もはやその愛が蘇ることは絶対にありえない。愛の真実性とともにある愛の蘇りの不可能性、これもまたこの作品の訴えるところである。

こうしてみると、ディアスはこの小説を通じ、キューバのソ連に対する愛（＝革命の理念）に間違いはなかったが（そのことの証明に小説の大半を費やしている）、その両者が変わってしまったいま（小説が書かれた2000年）、過去に戻ることはもはや不可能なのだと言っている。

4. アナ・リディア・ベガ＝セローバの場合

最後に、ロシア人とキューバ人のあいだに生まれ¹²、長じて作家になった人物を読んでみよう。その名をアナ・リディア・ベガ＝セローバという。プエルト・リコ作家にアナ・リディア・ベガという同姓同名の作家がいるので、キューバの作家には最後に母親の姓セローバを付けることで区別する。

アナ・リディア・ベガ＝セローバは1968年レニングラードで生まれている。父親がムラート（黒人と白人の混血、つまりプーシキンと同じ）で、母親がロシア人である。ロシアとキューバの混血は母をロシア人とし、父をキューバ人とするこのパターンのほうが多く、先に触れた二篇でも恋愛は常にこのような間柄に生まれていた。ベガ＝セローバは生まれてすぐにキューバに移り、そこで9歳まで過ごしたあと、両親の離婚にともなって母の祖国へ移り、ベラルーシ、ロシア、ウクライナに住む。ソ連では美術を学び、1989年、21歳のとき、キューバに渡り、そのまま島を住処として現在もキューバのハバナ（アラマール地区）に住んでいる¹³。

キューバにきたときに、ロシア語で書いていた自作（主に詩）をスペイン語に翻訳し始め、その後スペイン語での創作（主に短篇）に着手する。97年、短篇集『*Bad Painting*（下手な絵）』でキューバ国内の文学賞を受賞している。筆者の手元にある何冊かのキューバ短篇アンソロジーをめくってみると、そのほとんどに彼女の名前があり¹⁴、若くから注目されていた作家であることが分かる。長篇としては『*Noche de Ronda*（夜警）』（2001）、自身の短篇集は『*Estirpe de papel*（紙の家系）』（2013）などがあり、絵も描いている。

そのなかで、2007年に出た『*Ánima fatua*』¹⁵は彼女の経験を題材にとった「自伝的」な小説である。タイトルの形容詞「*fatua*」は訳しづらく、「愚かな、思い上がった、うぬぼれの強い、中身の無い」とさまざまな意味をもっている（*ánima*は「魂」という意味）。彼女の父であるキューバ人と、母であるロシア人とのレニングラードでの出会いから書き起こされ、キューバ時代の幼少期、ソ連で過ごした青春を綴り、ソ連を旅立ち、小さい頃に住んでいた土地＝キューバに戻るところで終わる。これは、先ほど述べた彼女の経歴とぴったり重なる。

読んだときに強い印象を残したのが、ソ連の町の描写である。三つ続けて引用しよう。

レニングラード——いまのサンクトペテルブルク——は橋の街だ。ピョートルが建てた。(…)ピョートルはロシアにヨーロッパの窓を開けようとした。髭を切らせ、フランス語を使わせ、沼地に首都を建てて、窓を開けたのだった。(…)レニングラードは湿った材木と冷たい汗の臭いが、古くさい狂気の臭いが、博物館のような臭いがする。レニングラードは博物館と狂人、海と公園と白夜の街だ。捨てられた老人と画家、引退した船乗りと恋する男と孤独な女が棲んでいる。(p.7)

あたしはあっという間にオデッサに恋をした。潮の香りが不確かな思い出を運んできた。欲望や夢を目覚めさせ、あたしは目が覚めた。ぜったいに入学試験をパスしなくては。オデッサに住んで、街を歩き、浜辺で水と戯れるのだ。(p.60)

モスクワ、マスカバー、ラ・モスコビア。無数のニュアンスに満ちた雑然とした世界。ロシアのあらゆる稜線が、野蛮と進歩が、聖なるものと俗なるものが、ヨーロッパとアジアの矛盾が、そこに流れ込む。限らない相貌をもつ街。百回灰燼に帰し、つましい禁欲で蘇った街。逸脱と栄光と寂寥の混淆。その夜空は、広場のなかでもいちばん赤い広場の上で痛々しいほど赤く輝き、空気はスローガンに汚され、男は酒に酔って女々しく泣き、女は最終列車に間に合うように歩を急ぐ。老人と若者と犬。正教会とスーパーマーケットとジプシー。ホテル、頭にスカーフを巻いた老女、酸っぱいキャベツ、カーネーションの匂い。(p.86)

生まれたレニングラード、学校に通ったオデッサ、その後長く暮らすモスクワへと移動しながら、彼女は徐々にロシアの大地に呑み込まれていく。ヨーロッパの窓レニングラードには古びた西洋を感じ、淡い思い出のあるオデッサでは海にハバナを想起していた。それを経てロシアの中心モスクワに至るとき、彼女の筆致にはこれまでにない饒舌さと力強さが備わっている。

こういった街の描写のあいだで、苦難とともにある主人公の経験が綴られる。学校ではロシア語ができずいじめに遭う。友達もできず、もう一人の自分を作って遊び相手にする。母親からは虐待を受ける。自傷行為にも及ぶ。男から暴力も受ける。家を飛び出して流浪する。

ロシアにいいようになぶられるにもかかわらず、書かれていることの痛まじさが読者に伝わってきたとき、そこにあらわれるのは、なぜか辛酸や痛みではない。むしろ表現の新鮮さや表現することの悦びである。まるでロシアの大地に呑み込まれ、その大地と交わることで得体のしれない何かが作家ベガ＝セローバに胚胎し、それが赤ん坊のようにピュアな、無垢なものとして生まれてたかのようだ¹⁶。

彼女の文に宿る力強さと新鮮さは、おそらくこの本の自伝的な内容が、彼女にとって新しい言語であるスペイン語で書かれたことと関係がある。ベガ＝セローバはキューバに戻るまで、家族、友人、恋人の意向に翻弄されながら生きていくしかなかった。経済的な問題もあっただろう。そんな彼女にとってキューバで書くこと（描くこと）は自立した行為、誰の助けも借り

ずにできることだった。下手な絵（彼女の最初の作品タイトル）を描いたり、物語を書くためには、誰の助けもいらないという単純な事実がある。そういう面で経済的に最低限の生活を保証してくれるのが、キューバの制度だった。ロシアとの交わりで結晶したものを、難解な単語や文体、複雑な時制を駆使せず、むしろ初歩的なスペイン語で（ロシア語からの自己翻訳もしながら）書く。「8月だった。リンゴの木は果実を実らせ、雨は温かくて短く、あたりは蜂蜜とパンと赤い野生の花の匂いに満たされていた」(p.17)。

あるいは、以下のようなロシア語混じりのスペイン語が使われる。

80年代終わりのロシアのヒッピーは、粗野で屈託がない若者のグループで、国の大都市のいたるところにネットワークを張り巡らしていた。連中はカフェの周辺、公園、人気のないビル、大人が一時的に留守にしている家（vpiskaと呼ばれた）に集った。眠るところがないヒッピーは tusovka（合流場所）に来て、その晩の vpiska がある人を探した。いつも避難所と食べ物を差し出す別のヒッピーがあらわれた。ロシア語に英語や刑務所の俗語を混ぜた独特の言い回しを使い、ジプシーとも乞食ともつかない奇妙な服装を着て、花とドラッグと小さなプラスチック珠のネックレス feñki とビートルズが好きで、愛と平和と自由を信じていた。忠実に、偽りなしに、自分の信じることを貫いていた。彼らには二つの重要なキーワード、kaif と vlom があつた。kaif は快樂の極限を意味し、vlom はその反対語だ。(p.154)

このロシア語まじりのスペイン語はロシア・スペイン語（ruspañol）といったほうがいいかもしれない（彼女の場合にはロシア・キューバ語といってもいい）。このような彼女独特のキューバ語の修得とともに、ロシアの大地との交わりが形となって生まれている。この本を読むことは、こうした新たな命の誕生に立ち会うことである。

ベガ＝セローバはロシア文学を、ブルガーコフを、ツエターエワを、その他大勢のロシア前衛詩人を読み、その経験から成る「ロシア文学」を「キューバ語」で書いた。したがってこの作品を通じ、作家（＝語り手）の存在は、ロシアとキューバが二重に積み重なったものとしてある。キューバ語はロシアを書くためにのみ使われ、このロシアとキューバの二重性は、どちらか片方だけを取り出すことができないようになっている。ロシア（ボルシチ）がキューバ語（アヒアコ）で調理されたこの作品（ベガ＝セローバのソ連時代）はすなわち、ボルシチ＝アヒアコなのである。

おわりに

ここでは、ポストソ連時代に入ってから書かれたキューバ文学から3作を選び、内容を紹介しつつ吟味を加えた。どれも70年代から80年代を懐古する内容で、これらの小説がソ連時代のキューバの貴重な記録となっていることを確かめることができた。だがそれに加えて、これらの作品が過去を振り返ったものでありながら、ポストソ連時代を生きるキューバ人の、

未来に対する「構え」のようなものをそれぞれの方法で示していることを指摘してとりあえずの結びとしておきたい。最初の短篇からにじみ出る失われた過去への甘いノスタルジー、過去に居続けようとするキューバ人の振る舞いは、来る未来への戸惑いや漠然とした不安のあらわれではないだろうか。二作目はその最終部で、ソ連時代が絶対に取り戻せない過去であることが確認された。この作業は、一作目で想起されるようなユートピア的過去に浸ろうとする安易なノスタルジーに釘を刺し、過去の正しさを肯定しながら、その過去と決別することをキューバ人に訴え、そう行動するように迫るメッセージとなっている。三作目で明らかになったロシアとキューバの二重性は、これからのキューバにとって抜きにできない歴史や文化を背負った身体のひとつであり、作者は「自伝」を選ぶことで、文字通り身をもってそのことを示している。ここで触れた作品のみならず、ソ連経験をもつキューバ作家の作品は、米国と国交を回復し、急速に時代が変化しつつあるいま、ますます読解の待たれる作品となっている。

注

1. Casamayor-Cisneros, Odette, *Utopía, distopía e ingravidez: Reconfiguraciones cosmológicas en la narrativa postsoviética cubana*, Iberoamericana, Madrid, 2012, p.50.
2. アヒアコとボルシチの比喩は、以下の論文、Dmitri Prieto Samsonov and Polina Martínez Shivietsova, “...so, Borscht Does’nt Mix into the *Ajiaco*?: An Essay of Self-Ethnography on the Young Post-Soviet Diaspora in Cuba,” in Loss, Jacqueline, Prieto, José Manuel, *Cavier with Rum: Cuba-USSR and the Post-Soviet Experience*, Palgrave macmillan, New York, 2012, pp.133-159. にも見られる。
3. 先行研究として以下の論文がある。Puñales-Alpízar, Damaris, “Soy Cuba, Océano y Lisanka: De lo alegórico a lo cotidiano. Transformaciones en las coproducciones cubano-soviético-rusas”, *Revista Iberoamericana*, 243(2013, abril-junio), pp.479-500.
4. 代表的な研究書として、以下の二冊がある。Loss, Jacqueline and Prieto, José Manuel, *Cavier with Rum: Cuba-USSR and the Post-Soviet Experience*, Palgrave macmillan, 2012. なお、この本には、最近邦訳『バイクとユニコーン』（見田悠子訳、東宣出版、2015）の出したジョシュも「ロシア人の残したもの」という文章を寄せている。） Loss, Jacqueline, *Dreaming in Russian: The Cuban Soviet Imaginary*, University of Texas Press, 2013.
5. ソ連時代を懐かしむのは現在のキューバでは一般生活にも見られ、たとえばソ連の昔のアニメを流す飲食店の存在が知られている。またそれらが観光産業とも結びつき、観光客をソ連車チャイカに乗せるツアーもある。ノスタルジー現象を分析したものとして、スヴェトラナ・ボイムが提起する二つのノスタルジー概念（復旧的ノスタルジーと反省的ノスタルジー）がある。このノスタルジー概念については、石丸敦子「ノスタルジーのカルチュラル・スタディーズ——スヴェトラナ・ボイム『ノスタルジーの未来』の描くロシア——」、『クアドランテ』、東京外国語大学海外事情研究所、17号、175-186頁を参照した。ソ連時代のキューバについて研究している Jacqueline Loss もボイムを参照している（Loss, Jacqueline and Prieto, José Manuel, “Caviar con Ron: ‘Sdelano na kube’”, *KAMTCHAKA*, 2015, p.12）。本稿は必ずしもボイムのノスタルジー概念に従って文学作品を分析することを目的とはしていないが、作品の読解にあたっては、石丸氏の書評論文を多いに参考にした。
6. キューバ人作家によるソ連を描いた小説の研究も進んでいる。本稿では、註1に挙げた研究書や註4に挙げた二冊以外に、Heinrich, Carola, “Buscar en la ausencia. Lo soviético en los cuentos y las identidades cubanas,” *KAMCHATKA*, 5, Julio, 2015, pp.141-165. を参照した。
7. Fernández de Juan, Adelaida, “Clemencia bajo el sol”, *Nuevos narradores cubanos*, Ediciones Siruela, Madrid, 2002, pp.77-85.
8. Loss, Jacqueline, *Dreaming in russian*, p.23.
9. Strausfeld, Michi (ed.), *Nuevos narradores cubanos*, Ediciones Siruela, Madrid, 2000. *Voces cubanas: Jóvenes cuentistas de la Isla*, Editorial Popular, Madrid, 2005.
10. Díaz, Jesús, *Siberiana*, Espasa Calpe, Madrid, 2000.
11. ロシア文学者の前田和泉氏のご教示に感謝する。
12. キューバでは “agua tibia ぬるま湯” と呼ばれる。冷たくもなく熱くもない、中間的な存在だからである。
13. ベガ＝セローバの経歴については、López-Cabrales, María del Mar, *Arenas cálidas en alta mar: entrevistas a escritoras contemporáneas en Cuba*, Editorial Cuarto propio, Santiago, 2007. Cuesta, Mabel, *Cuba*

post-soviética: un cuerpo narrado en clave de mujer, Editorial Cuarto propio, Santiago, 2112. を参照。

14. 以下、ベガ＝セローバの作品が入っている短篇集を出版順に列挙しておく。 Garrandés, Alberto (ed.), *Aire de luz: cuentos cubanos del siglo XX*, Ediciones Letras Cubanas, La Habana, 1999. López Sacha, Francisco (ed.), *Cuentos cubanos*, Centro Cultural Pablo de la Torriente Brau, La Habana, 1999. Strausfeld, Michi (ed.), *Nuevos narradores cubanos*, Ediciones Siruela, Madrid, 2000. *Mujeres como islas: Antología de narradoras cubanas, dominicanas y puertorriqueñas*, Ediciones Unión(La Habana), Ediciones Ferilibro(Santo Domingo), 2002. Mary G. Berg (ed.), *Open Your Eyes and Soar Cuban Women Writing Now*, White Pine Press, Buffalo, New York, 2003. *Voces cubanas: Jóvenes cuentistas de la Isla*, Editorial Popular, Madrid, 2005. Garrandés Alberto (ed.), *La ínsula fabulante: el cuento cubano en la Revolución(1959-2008)*, Editorial Letras Cubanas, La Habana, 2008. García Cruz, Michel (ed.), *Mañana hablarán de nosotros: Antología del cuento cubano*, Editorial Dos Bigotes, España, 2015.
15. Vega Serova, Anna Lidia, *Ánima fatua*, Letras Cubanas, La Habana, 2007.
16. あるインタビューでベガ＝セローバは執筆を出産に例えている。

La literatura postsoviética de Cuba: recuerdos de ‘lo soviético’ y de ‘lo cubano’ en tres obras de los años 90s y 2000.

KUNO Ryoichi

Este trabajo intenta analizar tres obras literarias producidas en la era postsoviética de Cuba: se trata de “Clemencia bajo el sol” (1996), un cuento de Adelaida Fernández de Juan, *Siberiana* (2000), una novela de Jesús Díaz, y *Ánima fatua* (2007), una novela autobiográfica de Anna Lidia Vega Serova. Cada obra describe la relación estrecha entre Cuba y la Unión Soviética, además de la ruptura de aquella tras la caída del bloque socialista. En el cuento de Fernández de Juan, la protagonista cubana recuerda con nostalgia La Habana utópica en los años 70s y 80s. La novela *Siberiana* relata las aventuras de un cubano negro en Siberia, donde se enfrenta con todas las formas de la diferencia cultural entre Cuba y Rusia, logrando sobrepasar los obstáculos a pesar de su vida que ya está terminándose. Anna Lidia Vega Serova, hija de padre cubano y madre rusa, relata su adolescencia pintoresca en la Unión Soviética usando un idioma español “nuevo”, a veces mezclado con el ruso; su narración es una muestra de la nueva identidad rusa-cubana. Estas tres piezas permiten entrever una nueva literatura cubana y tienen un valor histórico para interpretar la realidad cubana.